

盲ろう者のコミュニケーションの可能性

東京都立大学大学院

福 島 智

はじめに

筆者は、9歳で失明し、18歳で失聴した盲ろう者である。その後、指點字という新しいコミュニケーションの発見や多くの協力者に恵まれ、盲ろう者としては我が国で初めて大学で教育を受けることができた。現在は、東京都立大学大学院に在籍し、教育学を専攻している。

本稿では、「盲ろう」という障害について、そして、盲ろう者とのコミュニケーションのあり方について述べたいと思う。その際、筆者自身の経験に負うところが多く、コミュニケーション手段やそれを用いての通訳の問題は、指點字とそれを用いての通訳が中心となっている。その意味で、内容的にはやや偏りがあり、また紙数の関係で記述を簡略にした部分も多い。指點字と通訳についてさらに関心を持たれる方は、「ゆびで聴く」(松籟社、1988)を随時参照して頂くことをお勧めする。

本稿が盲ろう者とその問題に関心を抱く読者に、何らかの示唆を与えることができれば幸いである。

1. 盲ろうとは何か

「視覚と聴覚をほとんど、或いは完全に失うことは、主要な感覚の通路を失ってしまうことである。そして、その通路とは、人間が直接的な情報を得て外界を理解し、また一つの全体的な概念として素速く世界をとらえる時に用いている通路なのである。」¹⁾(Smithdas, J. 1976)

アメリカの盲ろうの詩人、ロバート・スミスダス (Robert, J. Smithdas) は、「盲ろう」についてこのように述べている。スミスダスは、ヘレン・ケラー (Helen Keller) に次いで、アメリカで大学教育を受けた二人目の盲ろう者として有名な人である。

「盲ろう」とは一体何か。「盲ろう」の定義はどのように行われるのか。

この問題について、医学的及び教育学的見地からの解答は試みられているが²⁾(伊藤ら, 1981)、一般的なものはない。例えば、我が国における状況を見ても、1969年の文部省の調査では、20歳未満の盲ろう児が161人としながら、1970年の厚生省の調査では、18歳以上の視聴覚障害者が2万2千人も存在するとされている³⁾(伊藤, 1981)。こうした数のばらつきは、調査方法や障害の基準のとり方の違いによるものと思われるが、基本的な問題は、「盲ろう」という独自な障害が行政側の念頭から抜け落ちているということであろう。このことは教育や社会福祉の現場においても同様ではないだろうか。

しかし、どの程度の障害を持つ盲ろう者がどの程度存在するのか、という実態が明らかでないにしても、視覚と聴覚に何らかの障害を併せもつ人が、現実に相当数存在することは確かであろう。アメリカでは、4万から4万5千人の盲ろう者(deaf-blind people)がいると言われており、人口比から考えて先の厚生省の調査もほぼこれに対応していると思われる。

ところで、「盲ろう」とはどのような状態のことなのだろうか。特に、完全な盲ろうの状態にある者には、世界はどのように感じられるのだろうか。筆者自身、かつて健常児だった時に、ヘレン・ケラーの物語を読み、盲ろうという状態を想像しかねた記憶がある。そして、現在自分がその立場になってみて、今度はそれをどう表現すればよいのかにしばしば戸惑う。恐らくこれは、視覚障害者が健常者に「視覚障害」というものの本質を伝えようとする時に感じるもどかしさと相通するものであろう。

人間の感覚は大きく分けて、内部感覚と外部感覚にわけられるだろう。そして、一般に外部感覚は「五感」といわれ、視・聴・触・嗅・味の五つが分類される。盲ろう者は、このうち視覚と聴覚を奪われている訳であり、従って残されているのは、内部感覚と触覚・嗅覚・味覚ということになる。これら四つから構成される世界——それが盲ろう者の生きている「世界」である。

味覚は食物を口にしていない状態ではほとんど意味をなさない。嗅覚は人間の場合動物と異なり、あくまでも補助的な情報を与えるにすぎない。そして、触覚は手の届く範囲にあるもの、しかも手で直接触れることができあり、接触によって身体が傷つけられないような対象についてのみ情報を提供するのである。

結局、盲ろう者の世界は、内部感覚の占める割合が増大し、いわば、「世界のはほとんどを自分自身が占めているような世界」に生きていることになる。そこは静かで暗い空間である。盲ろう者にしてみれば、特に何かの臭いや振動がない以上、自分自身の体が占めている場所以外に「世界」は存在しないのに等しいのである。たとえ同じ部屋に何人の人がいようと、また、たとえどんなに近くにいようと、直接手を触れあっていない限り、盲ろう者は他の人とは同じ「世界」には存在していない。このことについて、筆者はかつて「盲ろう者の手が他者の手から離れた瞬間、彼はまるでクラインの壺（よく知られている「メビウスの輪」を一次元高くした位層幾何学的なモデル）に入って異次元に行く如く、この世界から全く隔絶されてしまうのだ」と述べた。

こうした状態は、人間にとて極めて大きなフラストレーションを与える。例えば、このことを理解するうえでアメリカの心理学者ヘップ（D. O. Hebb⁴⁾）が紹介している「知覚的な隔離実験」（感覚遮断）は興味深い（1975）。

この実験は、視覚・聴覚をはじめ、あらゆる外部感覚ができる限り遮断し、さらに身体運動をも極度に制限した条件を作り出し、人間がどこまでそれに耐えられるかを調べたものである。その実験結果は劇的だった。何もしないベッドに横たわっているだけで多額の報酬を得られるという条件にもかかわらず、ほとんどの被験者が2日ないし3日が限度であった。隔離状態に置かれた被験者は、筋道立てて思考することが困難になり、簡単な問題も段々解けなくなる。そして、ついには幻覚を見るようになると言う。

この実験の被験者が置かれた状態は盲ろう者のそれとは異なる。盲ろう者には視覚・聴覚以外の感覚が備わっている訳であり、また、身体的運動も可能だからである。しかしながら、ここで注目されるのは、例えば骨折などで長期間ベッドに横たわっていても、ラジオや話し相手などの情報やコミュニケーションが保証されている場合には、決してこのような異常な状態は生じないということである。すなわち、この異常な状態をもたらした本質的な要因は、身体的な自由の制限ではなく、外界からの情報と外界とのコミュニケーションの制限、いわば「精神的な自由の束縛」にあると考えられるのではないだろうか。そしてこの「精神的な自由の束縛」は、まさしく盲ろう者が受けている「束縛」

なのだ。

従って盲ろう者は、「知覚的隔離実験」がもたらす苛酷な影響をその精神に受ける危険性に常にさらされている存在であると考えることができるのではないだろうか。

では、こうした「危険」を回避し、盲ろう者が人間的な生活を送るために何が必要であろうか。筆者がここで重要だと考えるのが「コミュニケーション」である。身体的運動を保証し、盲ろう者の外出や社会的な活動を保証していくことは勿論重要である。しかし、それらはコミュニケーションに裏うちされて初めて意味をなすものであり、盲ろう者の人生にとって最も切実な要求はコミュニケーションの保証だと考えるのである。

こうした観点から、以下、盲ろう者とそのコミュニケーションの問題について考えてみたい。

2. 盲ろう者のコミュニケーション手段

「コミュニケーション」という言葉は、現在極めて広い意味で使われている。ここでは主に人間から人間に情報が伝えられることという意味で理解したい。

さて、一般的に人間同士のコミュニケーションで最も多く用いられるのは、音声言語である。しかし、盲ろう者には音声言語が利用できない。中途盲ろうの場合、発声には問題のない人が多く、そうした人達は他者への意志の伝達は音声言語で行える。しかし、他者の音声を聞いて理解することはできない。また、先天盲ろうやそれに近い人達の場合、音声による発話が困難なことが多い。いずれの場合でも、少なくとも「受信」においては音声言語以外の何らかの方法を用いざるを得ないことになる。

アメリカの盲ろう者向けの雑誌、「ザ・デフブラインド アメリカン」の中で、盲ろう者ミッセル・スミスダス (Michelle, J. Smithdas) は、盲ろう者のコミュニケーション手段について述べている⁵⁾ (1984)。彼女は、指文字 (Finger spelling)、手話 (Sign Language)、手書き文字 (Print-on-palm) 等15種類をあげている。その中には、点字とアルファベットを併記したカ-

ドを用いる方法や、種々のコミュニケーターを用いる方法、相手の唇の動きやのどの振動を読み取る方法（振動法、或いはタドマ法とも呼ばれる）、さらには、モールス信号を応用する方法等も含まれている。こうした手段ができるだけ多く習得し、話し相手にあわせて使いわけていくことが大切だという。

これらの中で、最も一般的に用いられているのは、指文字・手話・手書き文字・点字の4つである。このことは、我が国においても同様であり、また他の諸外国においても大差はない。初期の盲ろう児教育においては、音声をそのまま触覚によって理解する振動法が重視されていたが、これは極めて高度な熟練を必要とし、習得するのが大変困難であることから、現在では教育現場でのウェイトは低下しており、実際に振動法をマスターしている盲ろう者は極めて少ないと思われる。例えば、振動法をマスターしているアメリカの盲ろう者レオナルド・ダーディー（Leonard Dowdy）氏に、1988年の夏、筆者が直接聞いたところによれば、アメリカでこの方法を使いこなせる盲ろう者は、恐らく10人いないであろう、とのことであった。我が国においては、少なくとも振動法を十分に習得した盲ろう者の例は皆無だと思われる。

先に掲げたものの中で、「点字」は、筆談を「点字」で行うということであり、特に説明を必要としないと思われる。従って、ここでは、手書き文字・指文字・手話についてまず考察し、その後、筆者が用いている指点字について比較・考察したいと思う。

手書き文字

これは「掌書き」とも言い、掌に人差し指等で平仮名・片仮名・漢字等の墨字を書く方法である。この方法の長所は、墨字を知っている人なら誰とでも会話ができるということであり、また練習すれば、頬や背中など掌以外の部分でも読めるようになる。筆者自身は得意な方法ではないが、盲ろう者の友人の中には、どんなに速く書いても読みとれる人がいる。また、仮名だけではなく、漢字を混ぜて書いても理解でき、かえってその方がわかりやすいという盲ろう者もいる。

この方法の欠点は、スピードの遅さであろう。「どんなに速く書いても」と言ったが、指をどれほど素早く動かしても、一文字を形作るまでに時間がかかる。

るので、結局情報伝達のスピードは落ちてしまう。一対一でゆっくり話す場合は問題はないものの、他の人の言葉を伝える手段としては適しているとは言えないだろう。

指文字

指文字にはいくつかの種類があるが、ここでは二つだけをとりあげる。一つは、アメリカ式指文字で、片手を用いてアルファベット26文字を表す方法である。これを日本語に取り入れる時は、アルファベットをローマ字式に綴って用いている。もう一つは、日本の聴覚障害者が用いている指文字である。これはアルファベットのかわりに50音を片手で表す方法だ。どちらの指文字も、5本の指をいろいろな角度に曲げたり、動かしたりして文字を綴る。そして、これを盲ろう者の掌におしあてるようにしたり、或いは、空中に呈示したものを盲ろう者が触るようにして伝えるのである。

日本語式の指文字の場合、字数が多いだけ形も複雑であり、また動きもアメリカ式より激しくなる。一方、ローマ字式の指文字は、動きが少なく文字の種類も少ないので、触読には適しているものの、文字の数自体は増えるのでそれだけ煩雑になるという面もある。

どちらの指文字の方が速いのであろうか。神田和之(1986)は、「指文字の研究」の中でこの問題について触れ、諸条件を総合的に考慮すれば、日本語式の方が速くなるだろう、と予想している。⁶⁾しかし、神田は聴覚障害者が読み取ることを想定しており、盲ろう者が読み取る、すなわち触覚によって読み取ることを考慮すれば、動きの少ないアルファベット式指文字の方が盲ろう者には適していると思われる。

もっとも、日本語式指文字の方がより一般的であり、コミュニケーションの可能性を増大するという意味で、盲ろう者は両方の指文字を習得していることが望ましい。

指文字は手書き文字よりも速い点が長所である。また、発話が困難な盲ろう者にとっては、発話のかわりになる、という点も見逃せない。勿論、手書き文字も発話の代用にはなる。盲ろう者が相手の掌に指で字を書いたり、空中に字を書いて言葉を伝えることもできる。しかし、連続的な動きの中で文字を作り

出していく手書き文字とは異なり、指文字は、一つの形、一つの動きが一つの文字に対応しており、発話手段としてより効果的と考えられる。

手話

手話は聴覚障害者が用いる手話を原則として利用する。主にろうから盲ろうになった人が用いており、アメリカでは手話が盲ろう者のコミュニケーション手段として広く通用している。それは、ろうからやがて盲ろうへと移っていく病気(*Usher's Syndrome*)がアメリカで多いこととも関係しているであろう。我が国の盲ろう者でも、ろうから盲ろうになった人、及び聴覚障害者とのつきあいが深い人は手話を用いている。

手話は本来視覚的な言語である。従って、触覚に頼らざるを得ない盲ろう者にとって、必ずしも適した会話法とはいえないだろう。従って、盲ろうになってから初めて手話を学ぶにはかなりの困難がつきまとうと思われる。しかし、すでに手話を習得している場合には、手話を「触読する技術」だけを練習すればよいので、比較的スムーズに触覚による手話の会話に移行できると思われる。

手話の長所はそのスピードである。一つ、ないしごくわずかな動きが、一つの意味内容を構成するのであるから、一つの動きが一つの文字に対応する指文字と比べれば格段に速くなる。

「手話の考察」の中で田上隆司が紹介している資料では、音声語で話した時の1.42倍の時間で、手話の表現がなされている(中野、1981)⁷⁾。しかし、筆者の実感では、特に手話通訳に熟練した人が通訳する場合、音声語とほぼ同じ速度で伝えられると思われる。

もっとも、ここで問題となるのは、こうした手話が持つ本来の速さが、触読する場合に、どれほど減じられるかということであろう。日常的な会話やあいさつ程度ならば、ほとんど問題はないと思われるが、こみいった話になってしまったり、多くの種類の手話が用いられる時にどこまで素早く触読できるかについては明確ではない。

手話のもうひとつの長所は、指文字の場合と同様、発話の困難な盲ろう者にとって発話のかわりになるということである。しかも指文字と比較して、手話は遠く離れても見ることができ、従って同時に複数の人に言葉を伝えること

が容易である。筆者は、特に先天盲ろう者やそれに近い盲ろう者にとって、手話が重要な発話手段になると考える。というのは、指文字ではあまり速く出しすぎると読み取る側が読めないという問題が生じてくるからであり、また、先にも述べたように、離れた場所にいる人も含め、同時に複数の他者に言葉を伝えられるという点は、大変大きなメリットだと思われるからである。盲ろう者は情報の受容に極めて深刻な障害を負っているが、音声による発話が自由にできる場合は、ある程度それをカバーできる。しかし、それが困難な盲ろう者の場合、情報の伝達だけでなく、情報の受容の困難をも增幅させることになる。例えば、「今何を話しているのか」、「今他の人は何をしているのか」といった質問を素早く相手に伝えられないことは情報の受容にとって致命的である。その意味で、盲ろう者の有効な発話手段のひとつとして、手話は重要な役割を果たすのではないかと考えるのである。盲ろう児教育において、手話の重要性を再考する必要があるのでないだろうか。

指点字

指点字とは「指で」、「指に」打つ点字のことである。これは、筆者が盲ろうとなって間もない、1981年の初頭、筆者の母が発見した会話法だ。原理は簡単である。盲ろう者の両手の人差し指から薬指までの計6本を、点字タイプライターのキーにみたてて、ちょうどタイプを打つ時のように話し手が、相手の指の爪のつけ根あたりを指でタッチすることによって言葉を伝える方法である。点字タイプを打つ時と異なるのは、それほど強くタッチする必要がないということと、マスあけ(分かち書き)のためのスペースキーがない、ということである。スペースに相当するのは、少し間をとるか、打ち方に強弱をつける、といった方法で表わすことができ、また、そうしたことが全くなくとも日本語の場合、文字の羅列でもかなり理解が可能である。

指点字は、文字言語の一種である点字を、音声言語にかわる会話手段として利用したものであり、その際、点字タイプライターの原理を応用したものである。ところで、我が国で使われている点字タイプライターには、そのキー配列に2種類ある(パーキンス型とライトブレーラー型)。また、話し手と読み手が同じ向きを向いて、並んでいる場合には問題はないが、向かいあって話す

場合は、ちょうど鏡を見ると左右が逆になるのと同じように、点字の配列（すなわち、指のタッチの仕方）も左右逆になってしまう。例えば、横に並んで座ってパーキンス型で話す場合は、盲ろう者の左手の人差し指が1の点、中指が2の点、薬指が3の点となり、右手の同じ指がそれぞれ4、5、6の点となり、話し手もこれと全く同じ「指使い」となる。しかし、向かいあってパーキンス型で話す場合は、話し手の左手の人差し指が1の点ならば、盲ろう者の右手の人差し指が1の点になってしまう。つまり、向かいあった場合は、本来タイプを打つ時の配列を使える人は、話し手か盲ろう者かのどちらかだけであり、他方の人は、左右逆のイメージを使わなければならないことになる。

この他、指点字を打つ姿勢や、指をタッチする場所等を考えあわせると数多くのパターンが考えられる訳だが、基本的には、話し手と読み手との妥協点を見出せばよいことで、実際に使っていく中でお互いに最も良いやり方を見つけられるだろう。

次に、そもそも指点字とは読めるようになるのか、という疑問がわいてくるであろう。筆者自身の経験や、筆者の友人である盲ろう者（彼らの内の何人かは、すでに筆者から教わって指点字を習得している）の状況から考えて、指点字を打つこと、および読むことは、通常の点字についてのそれよりも容易であると思われる。

まず、点字使用者であれば、指先に神経が集中しているのでわずかな練習でもかなり速く読めるようになる。点字使用者でなくとも練習次第で読めるようになってくる。少なくとも、紙に書かれた点字を触読するために必要なほど練習や努力をしないでも、指点字を読むことができるようになると思われる所以である。また、指点字を書く場合でもマスあけがないということが上達にとって有利な条件であろう。

さて、指点字は、これまで見てきた他のコミュニケーション手段と比べて、どのような特色をもっているであろうか。それは、第一に表現が正確で豊かであること、第二にスピードが速いことであろう。

まず、表現の正確さと豊かさについていえば、それはそのまま点字の表現の正確さと豊かさを述べることと同じである。すなわち、点字には、通常の日本

語はもとより、英語その他の外国語、数字、数学記号、各種の文章記号等が存在するので、それをそのまま指點字に利用できるわけである。また、点字は6つの点から構成される高度にシステム化された記号体系なので、新しい記号を作ったり、略字・略語を作るにも適している。実際に筆者は200程度の指點字略字を用いている。⁸⁾

なお、ここで詳述する余裕はないが、英語点字が存在するということから、例えば略字を交えた英語点字を指點字でそのまま表わすことができる。その際、スペースのかわりとなる記号（例えば、前置符として普通用いられない4の点を使う）を決めさえすれば、かなりの速度で読みとることができることを筆者は体験している。

次にスピードについて考えてみよう。スピードについては、他のコミュニケーション手段との比較を厳密に行なったことがなく、あくまでも体験的な記述になってしまうが、少なくとも盲ろう者が触読して理解可能なコミュニケーション手段の中では最も速く読みとれる手段だと思われる。

コミュニケーション手段それ自体の機能を考えた場合は、恐らく手話の方が速いであろう。また、盲ろう者が触読するにしても挨拶語や日常的な会話においては、手話を用いた方が早いことが多いだろう。しかしながら、総合的に判断した場合、指點字の方が速いと思われる。ただし、ここで問題なのは「速く読みとれる可能性がある」という意味であり、どの盲ろう者でも同じ程度に素早く読みとれるということとは異なる。しかしながら、こうしたことはどのコミュニケーション手段においても生じてくる問題なので、あえて指點字についてのみ個人差の問題をとりあげる必要はないであろう。

速度については、「ゆびで聴く」の中で、手書き文字、指點字の速度を比較した結果を紹介している（1988）。各々の方法に熟練した人に、物語を読みながら、それを1分間にどれだけ綴れたかを調べたものである。その結果、手書き文字は約100シラブル、指文字は250シラブル、指點字850シラブル、という数値が得られた。⁹⁾

しかしながら、この実験では「読み手としての盲ろう者」をおいておらず、「盲ろう者に伝わる速度」だとは必ずしもいえない。そこで、筆者自身が読み手

となって、今回指點字の速度を測ってみた。

新聞の社説や小説、専門書等を材料にして略字を使わない場合と使った場合を調べた。第三者が読んだものを通訳者が指點字で打ち、筆者の理解可能な速度を調節した上で、1分間に伝えられるシラブル数の平均を調べてみた。

その結果、略字を使わないで新聞の社説を材料にした場合、3回の平均は1分間に278シラブル、略字を用いて、新聞・小説・専門書について調べた5回の平均値は316.5シラブルであった。この2つの数値で表わされる速度は、点字1ページをほぼ1分から1分半で読む速度に対応する。通常の会話には、ついていける速度である。そして、この「会話についていけるか、いけないか」ということが通訳の問題と関わって極めて重要な意味を含んでいるのである。

3. 盲ろう者のための通訳について

盲ろう者とのコミュニケーションを考えた場合、まず一対一で話しをする、ということが重要である。それができなければコミュニケーションは始まらない。しかしながら、一対一の会話だけで終わっていては、盲ろう者と他者が常に「放射上の関係」でしか結ばれないことになる。

例えば、数人の仲間が集まって、その中に盲ろう者がいた場合、盲ろう者と誰かが一対一で話していたら、他の人とは孤立してしまう。盲ろう者の話し相手はかわるので、その意味で「孤立」する話し相手もかわりうる訳だが、盲ろう者の方は常に「孤立」していなければならなくなる。

こうした問題を解決するのが通訳である。ここでいう通訳とは、盲ろう者と直接手を触れあっている人が、第三者と盲ろう者との会話の仲立ちをしたり、第三者同士の会話や周りの状況について盲ろう者に伝えるということである。従って、通訳に用いる手段は何でも良い。筆者は指點字を主に用いているが、指文字でも手話でもかまわないし、勿論手書き文字でも通訳は可能である。しかし、ここでスピードの問題が重要となってくる。すなわち、周りの会話についていければ通訳ではなく、「要約」になってしまふからである。

盲ろう者にとっての望ましい通訳のあり方については、「ゆびで聞く」の中で詳述しているので、ここでは通訳にとって最も重要な点だけを述

べるにとどめる。

第一に、「沈黙を作らない」ということである。これは、盲ろう者と話す場合、いつもおしゃべりであれという意味ではない。個人的におしゃべりをするのではなく、常に何らかの情報を伝えるという意味である。ひとつの模範的な例は、ラジオの野球中継のアナウンサーである。盲ろう者と一対一で個人的な話しをしている時でも、常に周りの様子に気をつけることが大切である。何故なら、もし盲ろうという障害がなければ入ってくるであろう無数の情報が存在しているのであり、盲ろう者と直接手の触れている人は、そうした情報を伝える唯一の存在だからである。つまり、彼は盲ろう者の話し相手であると同時に必然的に通訳者でもあらねばならないのであり、それは言い換えれば、その瞬間ににおいて盲ろう者に「世界」を提供できる唯一の存在だということである。

第二にあげられるのは、第三者の言葉を伝える時に直接話法を使い、要約や省略をしないということである。ちょうど、劇の脚本と同じだと考えればいいだろう。劇の脚本には誰の言葉であるかがまず示され（これは指點字の場合ならば、発言者の名前の頭文字を書く）、その次に台詞がくる（この部分は、指點字の場合だと3.6の点を継ぎ符として打った後、発言をそのまま記す）。実際に発言された言葉が脚本でいえば台詞に対応する。台詞が勝手に省略されたり、要約されたりすれば演劇は成立しない。それと同じように、実際に発言された言葉は可能な限りぎりぎりいっぱいそのまま伝えることが望ましい。もっとも、場合によっては要約せざるをえないこともあるだろう。しかし、それが本来望ましいことではないということを明記しておく必要がある。

第三にあげられるのは、第一のことと関わるが、「状況説明」ないし「状況・通訳」をするということである。周りの人が何もしゃべっていないので通訳することがないというようなことはありえない。そういう時は、まず誰もしゃべっていないということ自体を伝えるべきであり、その次に、その他の情報（視覚的情報、聴覚的情報のいずれでもよい）を伝えるべきである。どんな情報もないというような状態はおよそ考えられない。そこにいる人達の様子（姿勢、態度、表情、服装）でもよいし、部屋の中にある物の状態や戸外の物音、ラジオ、テレビの内容……、といくらでも伝えるべき情報は存在するのである。

以上あげた原則は、指点字を用いての通訳において、筆者と協力者との間で作りあげてきたものであるが、先にも述べたように、他のコミュニケーション手段を用いてなされる通訳についてもあてはまることがある。

そして、どんなコミュニケーション手段を用いて盲ろう者と話す場合でも最も基本的な問題は、盲ろう者とともに生きたいと考えることであり、それは「世界」の共有をめざすことに他ならないのである。

尾関周二（1983）によれば、「コミュニケーション」とは、本来「共同化」、すなわち、「まじわり、共有しあい、共通の物を作り出す」という意味だという。¹⁰⁾盲ろう者とのコミュニケーション、盲ろう者のための通訳という問題を考える場合、この本来的な意味での「コミュニケーション」が大切だと考える。つまり、絶対的な孤独感を強いられている盲ろう者にとって、彼と言葉を交し、彼に言葉を伝えながら、ともに「共通の世界」を作りあげていくプロセスこそが最も重要なのではないだろうか。そして、このことは広く人間関係一般についてもあてはまることなのではないかと思うのである。

結び

読者の身近に盲ろう者はいないだろうか。家に閉じこもり、家族とも十分なコミュニケーションをとれずに苦しんでいる盲ろう者を知らないだろうか。

こうした盲ろう者とコミュニケーションをもち、彼らとともに生きてくれる人が一人でも増えることを願ってやまない。本稿では、いくつかのコミュニケーション手段を紹介し、それらの特徴を比較した。また、特に指点字については、その通訳の原則についてもふれた。しかし、こうしたことはあくまでも技術的な問題である。「盲ろう者とのコミュニケーション」にとって最も本質的なことは何度も繰り返す通り、「盲ろう者とともに生きる」ことであり、「共通の世界」を経験しようという気持ちである。今、ここで楽しげな会話が交されている。そして、同じ場所にいながら、その会話を共有できない盲ろう者がいる。そのこと自体に心の痛みを覚え、「通訳せずにはいられない」と感じる感性をもつことができる人ならその人に通訳の技術が備わっていなくとも、コミュニケーションの手段を使いこなす能力に劣っていたとしてもそれらは問題

にはならないのである。こうした「感性」は、恐らくどんな障害者にとっても、そしてどんな人間にとっても、何にもまして人生を豊かにしてくれるものなのではないだろうか。この「優しく鋭い感性」を他者に求めつつ、私達自身がそれをもつことをめざさねばならないだろう。盲ろう者の問題への取組みもこうした嘗みのひとつであると考えたいのである。

引用・参考文献

- 1) Smithdas, J. 1976 Papers presented at workshop on Usher's Syndrom, Helen Keller National Center For Deaf-Blind Youth And Adult
- 2) 3) 伊藤隆二・上出弘之編 1981 目や耳の不自由な子ども 福村出版 p168, p171
- 4) Hebb, D. O. (白井常他訳) 1975 行動学入門 紀伊国屋書店 p277
- 5) Smithdas, M. 1984 The deaf-blind American, American Association of the Deaf-Blind, November
- 6) 神田和之 1986 指文字の研究 光生館 p216
- 7) 中野善達編 1981 手話の考察 福村出版 p44
- 8) 9) 小島純郎・塩谷治 1988 ゆびで聴く 松籬社
- 10) 尾関周二 1983 言語と人間 大月書店 p158

《インフォメーション5 研究雑誌：1989年1月～6月》

障害者の福祉2月号——視覚障害者とハイテク（長岡英司）

(88ページより続く)

7. 江南施設を出た糖尿病視覚障害者の 清水 学（全国ベーチェット協会
生活……………江南施設）
8. 障害受容と自立への援助……………松本 佳子（東京厚生年金病院）